

ベゴニア栽培用培養土の変更について

田中宏昌

はじめに

コロナ禍に起因する園芸関連物資の輸入停滞はベゴニア栽培にも影響し、培養土のおよそ1/4を占める酸度調整済みピートモスについては、一年以上入手できない状態が続いている。そのため、継続的に栽培ができるよう酸度調整済みピートモスを使用しない培養土への変更を試みたのでこれについて記録する。

2022年11月まで使用していた培養土について

現在使用している培養土の配合はピートモスを主体としたものになっている（表1）。この培養土は水持ちをよくすることを目的に独自にブレンドしたものであるが、灌水の巧拙により根腐れさせてしまうことが多かった。また、植え替えた直後の水やりの際、ピートモスが浮いて溢れ出ることがあり、鉢の周りが汚れることが多かった。

新しい培養土について

以上の点を踏まえて、新しい培養土を考えた。また、過去の栽培経験から、pH5.5～6.5の弱酸性で、有機肥料分が全体の40%程度のものがベゴニアの生育に良いと考えられており、これらの数字に近い値となるように配合した。また、以前のピートモス主体の培養土より水はけが良くなるように新しい培養土では赤玉土主体の配合にした（表2）。以前の培養土より1Lあたり約5円費用を抑えることができた。

使用してみた感想

以前の培養土で問題となっていた根腐れについては、水はけが良くなったことと、乾き具合の判別のしやすさから改善するのではないかと考えられる。しかし、その分乾きやすくなったということにもなるので、夏場などの灌水ペースについてはよく観察しておく必要があると考えられる。また、植え替え直後の水やりの際、培養土が浮いて鉢の周りが汚れてしまうことについては、ピートモスの含有量を減らしたので

浮きづらくなったが、多少は浮くため丁寧な灌水を心掛ける必要がある。

来年度の課題

2022年11月末から培養土の変更を行ったので、一年通して栽培した際の生育具合を調べる必要がある。特に球根ベゴニアは展示スペースに出すための最後の鉢上げをしてから長いもので半年近く植え替えず展示するため、特に肥料切れや根詰まりに注意が必要である。また、ベゴニアは品種ごとに特徴の異なるものが多いため一品種ごとに生育具合を観察していく必要がある。来年度はこれらの点に注意しながら、より良い培養土にしていきたい。

表1 2022年11月までベゴニア温室で使用していた培養土

材料名	使用量 (L)	単価 (円) (1Lあたり)	培養土 1L 当たりの費用 (円)
ピートモス	40	20.0	4.6
ミックスピート	30	38.5	6.6
腐葉土	10	0.0	0.0
赤玉土 中粒	30	22.1	3.8
ボラ土 細粒	20	12.8	1.5
バーミキュライト	10	23.7	1.4
薩摩軽石	20	29.4	3.4
ネニサンソ	10	14.0	0.8
ベラボンチャコール	5	85.0	2.4
合計	175		24.4

表2 新しく採用した培養土

材料名	使用量 (L)	単価 (円) (1Lあたり)	培養土 1L 当たりの費用 (円)
ピートモス	20	20.0	3.1
腐葉土	30	0.0	0.0
赤玉土 中粒	14	22.1	2.4
赤玉土 小粒	35	22.1	6.0
バーミキュライト	20	23.7	3.7
ネニサンソ	5	14.0	0.5
ベラボンチャコール	5	85.0	3.3
合計	129		19.0